

岡本宗好家集、田村宗永編『露底集』

解題と翻刻（中）春・夏の部

大 谷 俊 太

本稿に於いては、前号の岡本宗好家集『露底集』上冊の翻刻に引き続き、架蔵本、田村宗永編『露底集』中冊に収まる春・夏・秋・冬の部のうち、春・夏の部の翻刻を行う。

対校本として、同系統の管見に入った唯一の伝本である国文学研究資料館所蔵本（写本一冊、中冊部分のみの端本、国文研本と称す）と、別系統の慶應義塾大学情報メディアセンター所蔵本（写本一冊、春の部のみの端本、慶應本と称す）を用いる。

国文研本には底本にない和歌が中冊全体で二十三首見られる。それらは行間に小字で書き入れられており、後に書き加えられたと考えられる。また、春の部のみで六九五首を収める慶應本と比べると、ほとんどの歌が慶應本と重なるが、底本の春部二百首のうち三首（50・153・193番歌）は慶應本に見えない。和歌の排列順も前後する。従って、底本は慶應本系統の本から抄出されたものではなく、依拠資料の多くは重なりつつも別の資料にも拠り、別個に編纂されたものと考えられる。

尚、国文学研究資料館所蔵本の書誌事項は以下の通り。

写本。一冊。江戸中期写。縦二九・九糎×横二〇・一糎。四つ目袋綴。楮紙、最初の二丁は裏打を施す。紺色紙表紙（後装）。外題なし。内題なし。墨付七十八丁。遊紙なし。半丁十行書き。題・歌各一行。筆者不詳。

〔翻刻凡例〕

- 一、本稿には田村宗永編『露底集』（架蔵）中冊のうち、春・夏の部の翻字を行った。
- 一、中冊の中で、和歌に通し番号を振った。
- 一、国文研本にのみ書き入れられている和歌は、当該箇所直前の和歌の番号に、（ダツシユ）を付して（ ）内に記した。
- 一、慶應本にある歌については、和歌の下の（ ）に慶應本の歌番号（古典文庫『近世初期諸家集』下所収に拠る）を示した。
- 一、国文研本との校異を右傍（ ）内に示し、慶應本との校異を右傍「」内に示した。但、詞書にある詠作年次・場所等についての記事に関しては、内容に違いがある場合のみ（ ）内に注記した。
- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、割書部分は《》で括り示した。
- 一、見せ消ちは網掛けで示した。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻刻〕

春歌

歳内立春

1 弘通 一とせの残る暦のおくもまだ巻はてぬ間に春はきにけり (1)

2 同同 行年を惜むとすればあやにくに日数残し〔尊ぬ日数を〕て春の立らん (2) (慶應本では「貞徳翁点」もあり)

3 通 くれはてぬ日数もまたでくる春はとしとやいはむ遅しとやいはん (3)

4 弘 長閑なるけふに明ては年のうちに春〔の慶應本も〕にをくれし春も珠らし (4)

立春

5 通 ぐる春の空にをくれぬ霞もやあらずひて立今朝ののどけさ (16)

早春

6 通弘 たゞ一夜近き昨日も今日に明て思へば遠しふる年の空 (10) (慶應本は「立春」題、上句「只一夜ちかきさ〔弘吉御点 たつや霞の浦慶御点〕のふもけふ〔だに、〕に明て」

評語「面白く候。」

7 同同 はるにけさ告るもわきてのどかなる雲ぬのたづの千代の初こゑ (7) (慶應本は「立春」題)

寛文十二年正月廿五日家之月次会に

8 弘 芦鶴のこゑも長閑に鳴始てはるにぞかへるわか〔の〕うらなみ (8)

9 通 さら〔の〕に又花も嬉しき色に出て咲べき御代の春のはつかぜ (9)

試筆に

10 弘 〱をのづから月日もをそく来る春を老せぬ門に今朝はむかへて (12)

11 雅 弘 〱筆の海に今朝うつしても先ぞみるさか行御代のはるといふ文字 (14)

12 通 弘 〱恵有はるを待得て諸人の心の花や先ひらくらむ (46)

13 通 弘 〱立ならば松を千年のあるじにてけふかど毎に春やとふらん (37)

14 弘 通 〱豊なる代にあふ春のうれしさを色に出てや霞そむらん (34)

15 通 弘 〱緑そふ千代のはつしほ今朝みえて春にひらくる門の松が枝 (36)

16 通 弘 〱鶯のこゑよりや先世に匂ふこと葉の花のはるもたつらん (35)

四十に成ける春

17 資 通 〱いつまでかとはたみそとかぞへつゝよそに思ひし春はきにけり (24)

五十の春

18 通 弘 〱咲花にぬるてふ夢の百年を半身に知春は来にけり (25)

都立春

19 雅 〱九重の柳桜の錦までおもかげそへてたつ霞かな (32)

暁立春

20 弘 〱鐘の音もかすみ初けり高砂の尾上はるかに春や立らん (29)

初春

21 弘 〱春のくる浦のはつしまはつかにもかすむ波路の末ぞ長閑き (58)

每家楽春

《寛文八年正月十日／松平丹後守殿御家御会始》

22 家〔宿〕ごと〔宿〕にいたれる春をやぶしわかぬ御代の光にたくへてぞしる (53)

元日雪の降侍りければ (慶應本詞書「延宝九年正月朔旦雪降ければ」)

23 弘 ふる雪はげに豊年のみつぎもの空よりつみて春やきぬらん (52)

早春待花

24 弘 梓弓はるをむかへて先ぞ思ふおもふどちみん花のまどるを (375)

早春霞 家月次会に

25 弘 むさしのはけふより千代の春の色に行末遠くかすむのどけさ (63)

朝霞

26 弘 弘 そことなく曇るとみれば朝日かげいで、かすみのふかきをぞしる (75)

〔国文研本26「さしのぼる山の朝日もくれなるのかすみに匂ふうぢの川波」(76)が入る。(慶應本詞書「寛文十二年正月

廿五日月次家之会に)〕

夕霞

27 通 立まじる夕けのけぶり末見えて一村ふかくかすむ山本 (79)

山霞

28 公 雪〔珍重に候。〕ながら春は時しるふじの根やなかばかすめる明ほの、空 (82) (慶應本詞書「阿野大納言公業卿御点」)

春山朝霞 田村右京兆御会三首中 (慶應本詞書「田村右京大夫殿宗永御家の会によみて遣しける」)

29 弘 よ〔珍重に候。〕のはるに今朝くりかへし小手巻のしづはた山のかすむのどけさ (81)

野霞 (慶應本では「松永貞徳点」もあり)

30 弘 いでそよと聞べき風の音もなしかすみになびくいなのさ、原 (89)

〔国文研本 30〕^同「むさしの、くさのゆかりかむらさきのかすみもなべてあはれとぞみる」(90) が入る

野径霞

31 弘 春の来てかすみぞうづむふみ分し雪は跡なきをの、細道 (94)

〔国文研本 31〕「野外霞」^弘「降つみし雪はとけゆく春野にふかき霞や又うづむらん」(93) が入る

霞隔遠樹

寛文九年二月家月次会 (国文研本は詞書なし。慶應本詞書「寛文九年二月廿五日家之月次会に」)

32 弘 おきかけてかすみそふらしうす墨にみえし絵嶋の松ぞ消行 (99)

〔国文研本 32〕「遠村霞」^弘「すむや誰家居ほのかに霞たつ野べより遠の里のひとむら」(96) が入る

関霞

33 資 足がらや関の戸かけて山の名の八重にかすめる春の明ほの (105)

34 弘 須磨のうらやせき吹こゆる風絶てうみ猶遠くかすむ春哉 (107)

35 恋すてふたが玉章のもじの関うき名となしに立霞かな (106)

ゆ滝霞 (慶應本詞書「鈴木兵九郎殿重明夢想開之会に二首」)

36 雪とくるたきの白波立そひてかすみや深き淵をなすらん (108)

海辺霞

37 弘 波の音は絶てしづけし浦の名のかすみ計や立わたるらん (114)

湖上霞

38 同 八重霞汀をこめてしがのうらや氷らぬ波も遠ざかり行 (122)

39 水より打出の浜による波の音はかすみの立もへだてず (123)

杜霞

40 かつ岡のもりのしめ縄長き日にかすみもいく重空にたな引 (104)

早春鶯 (慶應本詞書「寛文三年正月十日家月次会に」)

41 初春のはつねの小松それならで心ひかる、うぐひすのこゑ (130)

聞鶯

42 梅は散るうきふし有とくれ竹にぬぐらしめてやうぐひすのなく (134)

竹鶯

43 のどかなる軒端になれて呉竹のながき日あかず鶯の啼 (150)

寢覚鶯

44 子規おなじふるすの鶯や春のねざめをおどろかすらん (143)

鶯契萬春 相馬霜台御会 (慶應本詞書「延宝八年正月九日相馬彈正少弼殿昌胤卿家にて」)

45 萬代をかねてのどけき此やどのなれつ、来鳴うぐひすのこゑ (146)

雨中鶯

46 梅がえにぬるてふ花のかさやどり雨やどりして鶯やなく (153) (国文研本第二句「ぬるてふ」)

羈中聞鶯

47 古巢出ばなれもうぐひす都おもふたびの末のにあかずかたらへ (168)

名所鶯

48 所がら分て音よげに聞そめぬ若草山のはるのうぐひす (161)

49 鶯の長閑なる音に雪の中も春の印を三輪のすぎ村 (164)

山家鶯

50 谷近き山さくら戸にうつり来て匂ひそめたるうぐひすのこゑ (慶應本なし)

野若菜

51 紫のすみれにや又うつらましけふつみそむる野べの若菜は (171) (慶應本では「長嘯翁点」あり)

52 わかなつむ雪げの野辺は白妙に又ふりはへて袖の数そふ (175)

沢若菜

53 雪氷とくる野沢の水こえてつまぬ若菜や先あらふらん (177)

余寒雪

54 さはらずもむぐらの宿にこし春の又冴かへり雪やとつらむ (181) (国文研本第二句では「宿」)

谷余寒

55 谷河に閉し氷のうき橋や春かけて猶冴わたるらん (187)

湖上余寒 (慶應本では「長嘯翁点」となる)

56 遠ざかる冬とおもへば汀より氷にかへるしがのうら波 (189) (慶應本第二句「冬かと思へば」)

池余寒 天和二年正月廿五日家月次会

57 氷解てのどけき春と池水にいひ出し声又むせふなり (182)

残雪 延宝二年正月家月次に (慶應本詞書「延宝二年正月廿五日家月次会に」)

58 春風に解てふかさぞしられる梢みえ行雪のむもれ木（190）

梅遠薫

59 香をそへて音もはるかに笛竹の吹つたへたる梅のはる風（200）

夜梅

60 咲ぬともしられぬ夜半の梅が香に覚ておどろく手枕の夢（214）

61 いとふべき物としもなし手枕のすき間の風に匂ふむめが、（215）

〔国文研本61〕「はる風の吹わざならしむば玉の夜ふかき窓に梅が香ぞする」が入る（慶應本なし）

月前梅

62 ふくるまで夢もむすはず手枕にむめが、そひて霞よの月（216）

63 月かげに梅が、そへてかすむよの一かたならぬ哀をぞおもふ（219）

暁梅

64 起出し誰が袖の香をふかきよの月には残す梅の下かぜ（222）

中庭梅萌

《板倉尚食御山庄八景之中／野間三竹出題》

65 空たきの立すがるまもこすのくに独かほれるむめの下かぜ（227）

行路梅

〔国文研本では「^鳥」の合点もある。慶應本では合点者が「鳥丸」のみ）

66 立よらばこのもといかに打わたす袖さへ匂ふのべのむめが、（242）

67 過うしや梅のほひも道のべのかきねゆかしき春の夕ぐれ（243）

故郷梅

〔慶應本詞書「天和二年二月廿五日家月次会に」〕

68 ふる里のあれしかきねに梅ひとり昔へだてず咲匂ふらむ (241)

山家梅

69 香をとめてかれし人めもそひ行や梅咲比のはるのやま里 (245)

水辺梅

70 咲ぬらん梢ゆかしくとめ行はむめが、ふかし谷川のみづ (234)

春雨 (慶應本詞書「寛文七年正月廿五日月次家会に」)

71 淋しさもその事となく暮がたき春の日ぐらしながめふる比 (350)

72 春雨にはやこもりけりさびしさの秋はほに出ん萩の焼はら (353)

73 我身こそいとゞふり行春雨に四方の草木はあらたまれども (354)

朝春雨 (慶應本では「貞徳翁点」あり)

74 朝とあけて空に知ぬる春雨の音もきこえずふるき軒端は (356)

75 ねぐら出る山田の杉のむら烏鳴音もしめる春雨の空 (357)

夕春雨 (慶應本には「貞徳翁点」あり)

76 雨ならしくもる夕の鐘の音もかすみの底にこゑしめりぬる (359)

柳

77 緑そふ柳の糸は代々かけて絶ぬことばのはなの種なる (248)

78 くりかへし昔を今の緑かな柳の糸やしづの小手巻 (249) (慶應本では「柳糸」題。また「貞徳点」あり)

春色柳先知

79 弘はるの色にはや染出す青柳の糸の緑に引こゝる哉（250）
（国文研本は「珍重に候」）

柳風

80 通さしぐしのあかずよ風に青柳の打たれ髪をけづる姿は（257）
（も）

柳露

81 さほ姫の是やかざしの玉かづらつらぬく露の青柳の糸（262）

門柳

82 弘過がてにむすびし門の草ならで吹とく風の青柳の糸（269）

柳垂門前

83 くらべこしふりわけがみかうち垂てかどの井筒になびく青柳（265）

岸柳（慶應本詞書「承応二年正月廿一日甲良宗久会に」、また「貞徳翁点」あり）

84 朝川のけぶれるきしになびきあひて思とかれぬ青柳のいと（278）

河辺柳

85 竜田川さしの青柳糸はへて緑をくゝるはるのしら波（281）

行路柳（慶應本には「貞徳翁点」あり）

86 打たれて行手の袖も見わかぬや人めつゝみの青柳の糸（254）

故郷柳

87 雅あれゆけどいぶせくもなし古郷の柳のまゆにこもる軒端は（255）

帰雁 菊地東句詩歌会に

88 空の海にからろ音してふる里にかへるやいさむ雁の友船(弘) (581)

遠帰雁

89 はるくくと見送る末(正)もうす墨の色に消行かりの玉章 (587)

海帰雁

90 浦遠くかへるを見てや白波のすさきの雁もおもひたつらん(通) (592)

91 帰雁なれも名残はおし(同)てるや難波の海の霞かけ(明)ぼの(通雁本も) (593)

92 かへるかりうら山(弘)しくもとばかりの春のうみ辺に声聞ゆなり(波) (594)

湖帰雁

93 しがの浦や秋かぜふかば辛崎の松としちぎる春の雁金(弘) (595)

晴天帰雁

94 すむ月に数さへ見えてこし秋の面かげに又帰るかりがね(通) (584)

霞中帰雁 (慶應本には「長嘯点」あり)

95 うすくこくかきま(弘)ぎらはす玉章や霞かすまぬ空のかり金 (583)

雲間帰雁 (慶應本には「貞徳翁点」あり)

96 かげろふの入日の雲の絶間より有かなきかに帰るかり金 (585)

帰雁似字

97 しどけなき誰手習のはなち書空にうつして帰るかりがね(通) (588)

初春月 (慶應本には「長嘯翁 貞徳翁両点」あり。雅章点はなし)

- 98 雅 はるの来てかすみそめぬる久かたの月の桂や二葉なるらん (321)
月前霞 (慶應本詞書「承応元年二月十八日阿形但直会に」)
- 99 雅 哀さも幾重かすみにあまるらんひなはてそ月の下風 (322)
春月 寛文十三年二月家月次会に
- 100 あかすみん花待みねの霞より匂ひ出たる春のよの月 (325)
- 101 さやかにさしのぼる月の御舟山霞のみほに影をうかべて (326)
- 102 老らくは心とかすみむ月影を春のものとも何おもふらん (328)
野春月 (慶應本には「長嘯翁点」あり)
- 103 心をば月にもそめつ紫の堇つむの一夜ねしより (331)
浦春月
- 104 うら人の塩焼煙たゆるよもかすむうき名や月に立らん (336)
浜春月 百首統歌の中
- 105 弘 浦風の払とも見ず朧夜の月にかすみや吹上のはま (337)
春月幽 (慶應本には「貞徳翁点」あり)
- 106 立そへる霞の衣あつければもる影うすし春の夜の月 (349)
春暁月 天和二年二月家月次会に (慶應本詞書「天和二年二月廿五日月次家会に同じ心を」)
- 107 しづけしなね覚よふかき窓の内にさし入月の影もかすみて (348)
- 108 かすみこめてまだ夜ふかしと見る月をあかずわかる、峯の横雲 (345)

109 のどかなる春やあらそふ鐘のこゑ鳥の音そへてかすむよの月 (347)

110 ねやの戸に残る灯かげうすし明行月も空にかすみて (343)

春曙 寛文十二年正月家月次会 (慶應本詞書「寛文十二年正月廿五日月次家会に」)

111 しらずそのみぬよの春の哀まで霞にこもる曙のそら (312)

雲雀

112 声ばかり空に聞えて霞よりかすみの上にたつひばりかな (603)

野雲雀

113 露ふかきつばさやしほる春の、の朝日待出て雲雀立也 (607) (国文研本初句「露ふかき」)

夕雲雀

114 思はずやすみれ咲の、夕雲雀床をならべて一よねよとは (608)

野雉子

115 若くさにこもれるつまも顕れて野をやく煙たつきゝす哉 (611)

草漸青 延宝三年二月家月次会に (慶應本詞書「延宝三年二月廿五日月次家会に」)

116 冬枯し霜の岡辺の葛のはも春にかへりて緑そふらし (287)

春草

117 老ぬとてすさめぬ杜の下草ももえ出る春やこまかへるらん (292)

118 もえ出てまだうらわかき初草の中にまじれる花もめづらし (293)

(国文研本118「老ぬるも春はみどりに大荒木の杜の下くさ駒かへるらん (298)」が入る。慶應本は弘資点)

- 119 故郷の垣ねにもゆる草はあれどかれし人めははるとしもなし (294)
（慶應本には「貞徳翁点」あり。詞書「承応二年正月十八日片山与英会にて」）
- 120 春の色や、見えそめて降雨にかたへ消行雪のした草 (295)
（慶應本詞書「延宝八年正月九日 相馬弾正少弼殿昌胤御家にて」）
- 121 もゆれども有かなきかにかげろふのをのれみじかき雪の下草 (290)
（慶應本詞書「天和二年二月廿五日月次家之会に当座」）
- 122 もる月の秋よりもうし山桜まちし木間のこゝろづくしは (381)
（慶應本詞書「戸川土佐守殿安宣御家之会に」）
- 123 花はまだ枝にこもれる色香をも心にしめていそぎ馴ぬる (376)
（慶應本には「長嘯翁点」あり）
- 124 いそげ猶月待峯にいとひしも花にうれしき春雨の空 (384)
（慶應本には「長嘯翁点」あり）
- 125 峯をこえふもとにたどりけふもまた咲ぬ桜にちるこゝろ哉 (398)
（慶應本には「長嘯翁点」あり）
- 126 いろもかみいかなるたねぞ花といへば見まれみずまれ俤に立 (394)
（慶應本には「長嘯翁点」あり）
- 127 みる花のいつわすれめや咲そめて又たくひなき今朝の色かを (401)
（慶應本には「長嘯翁点」あり）

閑花（慶應本評語「催馬楽也。その戸ひらくの心めづらしく候」）

128 弘 雨そ、くまやのあまりのさくら花ひらくとほそにかほる春風（409）

129 弘 すべてよの春にひらくる朝より待れし花はけふぞかほれる（410）

花時心不静

130 弘 咲ぬやとこなたかなたによりかけて花に心のいとまなき比（399）

見花

131 めかれせずむかふうちにも咲花「咲花」のわきてはへある夕明ほの（429）

132 花ぞいまこそすまき上てみし雪の面かげながらかほる山かせ（430）

（国文研本132）「さけばかつうつるにつけていとまをあかぬなげきの花に添ぬる」（433）が入る

静見花

133 弘 しづけさのいつは有とも咲花の色香身にしむ明ほの、山（446）

（慶應本詞書「渡瀬宗二老にての会に」）

134 香にめで、ねぶる小蝶のしづけさもかはらじ花にむかふ心は（443）

（国文研本134）「閑居花 長嘯大原花見のとき五首歌の中／吹風も音せぬ宿の桜花こゝろづからの色もみてまし」（448）

が入る）

終日見花 奥山玄建家三而（慶應本詞書「奥山玄建老立庵にての会に」）

135 弘 明るよりあかすなれぬる花のかけに暮てやひゞく入逢の鐘（453）

（国文研本135）「かへらんもなをこのもとなごりあれやながき日あかず花にくらして」（452）が入る）

毎春見花（慶應本詞書「梶四郎兵衛殿重正にての会に」）

136 春ごとに匂ひそひゆく花に猶そむる心の色もいくしほ（440）

137 頼もましな幾春かけて花も身もともに老木のくちぬ契りは（438）（慶應本詞書「永井与次郎殿正次にての会に」）

水戸宰相殿御庭の花見にまかりて（慶應本には「弘資卿御点」あり）

138 萬代の春も経ぬべし亀の上の山も覚えずいつか来にけん（427）

（国文研本138「深山花」弘あさからぬ山を色香に咲花の有ともしらし尋いらずは」（509）が入る。慶應本には合点なし）

雨中花 上野檀那院僧正の坊二而（慶應本詞書「上野檀那院僧正胤海房にて会に当座」）

139 みるが内に咲かさぬらん降雨に色そふ花ぞ枝おもり行（532）

寄露花

140 めであかぬ花に契りを結び置てことしもゆらぐ露の玉の緒（534）

禁中花（慶應本には「貞徳翁点」あり）

141 咲にけり雲ゐの桜是ぞこの世におほふ花の袂成らん（491）

山家花（国文研本・慶應本評語「おもしろく候」）

142 とひこずはふかき色香も白雲のよそめ閉たる山のさくらど（510）

143 年も経ぬ花故にこそ柴の戸はしばし斗と結びそめしか（511）

花満山

144 さそはれん色としもなく咲みちて桜によはる春の山かせ（514）

名所花

145 降雪のおもかげ見せて鏡山又かきくもる花のころかな (517)

海辺花

146 花の香になる、や幾日うら人の塩焼衣身におはぬまで (526)

147 またれつるいそ山桜咲にけりみるめにあかぬはなの初しほ (528)

松間花

148 散うせぬ色ならはなん咲まじる松の葉山の花もときはに (535)

行路花 (慶應本詞書「奥山玄建老立庵宅にて会に」)

149 咲花の雲にいばへる声す也誰駒なべて山路わくらん (482)

150 あかず猶分入山のつゝら折咲そふ花はいく重ともなし (483)

舟中見花

151 こぎめぐり花しちらずは船の内に千世も経ぬべき春の池水 (524)

庭花 承応元年阿形但良会に (慶應本詞書「承応元年三月四日阿形但良会に」)

152 春は先梅よりなれて八重匂ふ桜をかざす庭の袖がき (422)

(国文研本152「庭前花 長嘯翁大原花見の時五首歌の中 なべて世にめづる言葉の種や是八雲たちそふ花の八重垣」)

(418) が入る。慶應本詞書「長嘯翁大原におはせし時五首の歌講られしに」

夕花

153 くれぬとて見捨んもうし山桜鳥はねぐらの花にかへるを (慶應本なし)

154 さらに又めにたつ花の錦かな峯の夕日の入あやのかけ (465) (慶應本には「長嘯翁点」あり)

〔国文研本154「暮山花 長嘯翁大原花見の時五首歌の中／花の色に夕の空はうづもれてくる、とみゆる山のはもなし」

(505) が入る

折花

155 通 一枝は人などがめそさくら花あかぬあまりに手折こゝろを (519)

花慰老 (国文研本には弘資点あり)

156 かざすより心の花も咲そひぬ我深山木の朽木ながらも (522)

花未飽

157 弘 春毎にそむる心を桜ばなうつさば色の千入ともみん (475)

毎春愛花

158 通 弘 すでにふれ心にして咲花のあかぬ色かぞいく春かへし (479)

見花延齡 (慶應本詞書「田中大隅守殿定房にての会に」)

159 弘 のづから老をもしらじ亀の上の山もこゝなる花の下陰 (437)

花契千年

160 弘 桜花契る千年もあかず猶かぎらぬ宿のはなに馴らん (542)

水上花 長嘯翁大原花見之時五首歌の中 (慶應本詞書「長嘯翁大原野におはせし時、五首の歌の中に」)

161 さそひあへず幾重か花のつもらん桜しがらむ山河のみづ (488)

花間鶯 相良遠州御会に

162 弘 此宿の花になくてふうぐひすやつきぬ詞の種をそふらん (540)

- 163 雪の中に先鳴そめし心ちして花にこづたふ鶯のこゑ (538) (慶應本には「貞徳翁点」あり)
- 惜花 (慶應本詞書「承応三年三月十八日清水六兵衛良世家に」)
- 164 おしとてもさのみしたはじ桜ばな春を限にうつらましかば (551)
- 惜落花
- 165 ^弘 さくら花心づからにうつるふと見るだに有を春の山かぜ (561) (国文研本・慶應本では通茂点)
- 落花 延宝二年三月家月次会に
- 166 あかずみし面かけ計身にとめて花は跡なくさそふ山かぜ (548)
- 167 ちる花の匂ひもたかく吹ためてあらしや雪の山つくるらん (558)
- 花半落 天和二年三月廿五日家月次会
- 168 咲みてる桜を雪に吹わけてなかさそへる春の山かぜ (556)
- 169 今朝は又ひとときは花の色そふや散敷計枝に残して (557)
- 落花似雪
- 170 散はなの陰にやすめる山人の薪の雪はおもしともなし (567)
- 河上落花
- 171 隙もなく散敷花の大井河さくらを分てくたすいかだし (572)
- 池上落花
- 172 ちりしきて汀まさされる池水の花に跡ある鳩のかよひち (568) (国文研本には通茂点あり)
- 雨中落花 (慶應本詞書「長嘯翁大原におはせし時 雨中落花当座」)

- 173 つくぐと見つゝを（をく）おらん庭（慶應本も）の面にはなな散しそ雨は降とも（570）（慶應本には合点あり）
- 花纒残
- 174 花の春残る日数の程なさも唯かばかりと匂ふさへうき（576）
- 野遊
- 175 是るの野に心ひかれて小松原初音の後もいくくらしつ（303）
- 176 すみれ（弥しく）つみ（同）蔭おる手にかぞふれば春の日数はたゞ野べにのみ（304）
- 苗代 延宝五年二月家月次会（慶應本詞書「延宝五年二月廿五日家月次会に」）
- 177 いくばくの生さき見えてしめゆひし苗代がきにこもる千町田（612）
- 苗代蛙（慶應本詞書「承応元年三月四日阿形但良会に」）
- 178 水まさる蛙のこゑや降雨の種となりぬる小田の苗代（616）
- 179 鳴の居し沢田のかはづ苗代にはねがきよりもしげき声哉（615）（国文研本・慶應本に長嘯点あり）
- 款冬 延宝二年三月家月次会（慶應本詞書「延宝二年三月廿五日家月次会に」）
- 180 はへ有て露も八重置ませの内に咲こぼれたる山吹のはな（627）
- 承応二年正月十二日阿形但直会に
- 181 咲そめし其陸奥の種よりや四方に散けん山ぶきのはな（626）
- （国文研本181「（弘）降雨に咲やまぶきの八重一重ぬれても清きはなのいろかな」が入る（慶應本なし））
- 水辺款冬
- 182 池水の底の玉もに色そへてうつるもなびく岸（同）の山ぶき（634）

〔国文研本182〕款冬露弘何事をいはでたゞにや山吹の花に置あまる露のみだればセイが入る（慶應本なし）

躑躅

183 小倉山たてしほぐらしを夏またで所くに見るつゝじかな（慶應本には「貞徳翁点」あり）

184 はつわらびあさる山路に色みえて咲ば又折岩つゝじかな（慶應本には「貞徳翁点」あり）

水辺躑躅（慶應本詞書「曾谷長順老にて」）

185 中にある思ひを今や岩波の打出打出けりにけりと咲つゝじかな（慶應本詞書「金森帯刀殿範門興行」）

春山（慶應本詞書「金森帯刀殿範門興行」）

186 弘 いつは有どいづくは有ども花かほり月かすむ夜の明ほのゝ山（306）

松藤相馬霜台御会（慶應本詞書「相馬弾正少弼殿昌胤御家之会に」）

187 紫の色しあせずは咲藤の松にかゝれるしるべともみむ（654）

188 分て猶ながしとぞ見る山鳥の尾上の松の藤のしなひは（652）

松間藤

189 生しげる岩ねの松の木がくれに種こしあればと藤も咲らん（656）

紫藤蔵松

190 一もとのまつはみながら紫の色と見るまで咲る藤が枝（658）

池藤（慶應本には「貞徳翁点」あり）

191 底此歌本ノマ、るなき淵ともみえず咲わけてあだ波さはぐ池の春風（664）

橋上藤

192 八はしにかけてもみばや杜若ゆかりのいろに咲る藤なみ（663）

古寺藤

193 寺ふりて水なき池の春風にひとり岩打岸のふちなみ（慶應本なし）

雨中藤 増宗春宅

194 咲ふぢの色はいくしほ紫の糸よりかけて降るはるさめ（661）

ある所にかめに藤をさせるを見て

195 有しにも猶色こえて咲花のむかし覚ゆる藤の陰かな（669）

残春少 天和二年三月家月次会に（慶應本詞書「天和二年三月廿五日家月次会の当座」）

196 さらに今惜もはかな春夜のみし夢ばかり残る日数を（691）

暮春雨

197 みし花の朝の雲も夕暮の雨とふり行春のくれかな（682）

山家暮春 中川作州御会（慶應本詞書「中川佐渡守殿久恒御家にて」）

198 柴の戸の花に恨し風計音を残してはるぞくれ行（687）

江上暮春

199 氷とけし昨日ははるもふかき江に日数ながれてくれゆくはおし（695）

暮春のうたとて（慶應本には「貞徳翁点」もあり）

200 花さかぬ朽木のそまに入ひともはるの暮をば聞や惜まむ（672）

（国文研本結句「聞や惜まん」）

首夏風 延宝九年四月家月次に

201 咲花にいとひしうさも忘れぬ垣ねのうばらかほる朝風

202 吹送るわかばのみどり涼しくもけふより夏にならの下かぜ

更衣

203 (寶)夏衣けさよりたつの市人もやすくはかへじ花染のそで

204 通公弘 孫重に勝木隠に鳴音も聞ん立かへてけふより涼しせみの羽衣

小西昌納家二面

205 ふかみどり花の梢をそめかへてすゞしくみゆる山姫のそで

寛文十二年五月家月次に

206 夏衣かひなくたゝん花ぞめの袖になれしも夢計にて

遅桜 百首統歌中に

207 寶たぐひ今夏に契を結び置てひもとく花の一木成らむ

新樹

208 青葉にぞ心の花もうつり行散し桜の梢のみかは

209 弘今よりはすゞみよらまし陰高きかつらの梢みどりそひ行

庭新樹

210 庭ひろくたゝめる山の木深さもしげる若葉にみえて涼しき

- 221 降つみし雪にまがひて夏箕河なつをうづめる岸のうの花
岸卯花
- 220 これや其雪にもとめし竹の子のおふる籬にさけるうの花
籬卯花
- 219 さやけさは外にしられぬ月影も有とや爰にさけるうの花
卯花 寛文十二年五月家月次会に
- 218 うすきこき山のみどりにくらべては花も青葉の麓にやみん
- 217 待うさもうつる歎きもいざしらで青葉や花に千重増るらん
弘 新樹勝花
- 216 宮城の、木の下深く茂るらし緑の色ぞ雨に増れる
- 215 松楓うへにしまやの雨そ、き立ぬれぬまでしげるかげ哉
- 214 降雨にいろそふ秋の千入まで心にそむる若かえでかな
雅 雨中新樹
- 213 陰ふかく霜のふりはもいつの間にしげるみどりの水茎の岡
- 212 なたはらに見し深やま木も花のえもひとつ梢にしげるころ哉
弘 岡新樹
- 211 うすくこく色どる山のわか緑花の千枝もえやは及ばむ
資通 山新樹

谷卯花

222 谷かげに咲卯花は夏もなを埋しまゝの雪かとぞみる

卯花誰家

223 咲にけりたがうつ木垣白雪に冬ごもりせる宿と見るまで

卯花似月 山本玄広宅三冊

224 夜比へて猶照そはん咲かゝる初うのはなや三ヶ月の影

夏雨

225 夏に入て咲てふ花も橋の本に色香そひ行雨の中かな

葵 延宝七年四月家月次会に

226 くもり日本のみえぬ空にもあふひ草かげやはなれずさしむかふらん

待郭公

227 浪かくる磯のまつよはかさなれどねに顕れぬほとゝぎすかな

228 貴時鳥なかな恨は晴やらで空にむなしくすぐる村雨

229 子規待夜かさなる小夜衣夢にもみえばかへしてもねん

(国文研本 229) 弘「雨にうらみ月にかこちて時鳥空にむなしき日数をぞふる」が入る

初聞郭公

230 あらためて今朝ぞ聞つる時鳥心に残る去年の初こゑ

郭公 寛文九年四月家月次会に

231 珎らしと聞もさまぐ有が中ににたる声なる時鳥かな（国文研本第四句「にたる声なき」）

嶋津飛州御家御会に

232 一こゑに心ぞうつるしたひこし花は跡なき山ほと、ぎす

聞時鳥

233 ほと、ぎす待しよ比のうらみ迄晴行雨に過る一こゑ

尋郭公

234 過がてに鳴音もうれし尋こし印を三輪の山ほと、ぎす

夢中時鳥

235 心から聞しとやいはん時鳥おもひねにねし夢の一こゑ

236 時鳥聞つる夢の一声におもひあはするあかつきもがな（国文研本第三句「一声に」）

時鳥幽

237 さだかには聞も定めず郭公やみのうつ、の夜半の一こゑ（国文研本には通茂点あり）

238 うつ、とは猶ぞわかれぬ時鳥さめても同じ夢の一声

遠時鳥 百首続歌中

239 しとふともなど白雲のよそにのみすぐる高まの山ほと、ぎす

暁時鳥

240 待にねぬ思ひを知やほと、ぎす八声の鳥にそへし一こゑ

曙郭公

241 通 時鳥もらしそめつる一声はいづれの雲ぞ明ぼの、山

朝時鳥

242 弘 時鳥こゑ身にしみて有明の光治るそらになくなり

寢覚郭公

243 哀そふねざめに幾夜おもひ入我あらましの山ほと、ぎす

244 郭公夢より外におどろくやね覚の床に過る一こゑ

旅宿のねざめにほと、ぎすを聞て

245 かへれとやなれもいさめて故郷を思ふね覚になくほと、ぎす

箱根山ニ而時鳥を聞て

246 弘 二こゑときかであやなく今宵さへ明る箱根の山ほと、ぎす

山家郭公

247 弘 住山のかひも有けり時鳥またで聞つる今朝の初音は

海辺時鳥

248 同 明石がたこぎ出てきけば時鳥あはとはるかに過る一声

野時鳥

249 時鳥春の小松の野辺に来てをのが初音も引こ、ろかな（国文研本には弘資点と評語「めづらしく候」あり）

るもじを置て

250 るいもなきふじより出てすその迄名のるも高き山ほと、ぎす

- 251 たどる也鳴時鳥一こゑも遠里をの、雨のまぎれに
里時鳥
たもじを置て
- 252 聞てしも夢かとたどる時鳥今宵ふしみの里の一こゑ
杜郭公
- 253 時鳥涙をたれか柏木の杜の雫にぬれてなくらむ（国文研本第二句「涙を」
哀其むかしかたらへほと、ぎす我も老そのもりの梢に
時鳥両方
- 254 吉野川中にへだて、鳴ぬ也是やいもせの山ほと、ぎす
郭公頰（国文研本評語「公万葉、妻恋すらしさよ中に、といふ歌の心殊勝二候」
弘公
255 雅 妻ごひの色に出てや時鳥しのぶもぢずり乱てぞ鳴
- 256 雅 未飽時鳥
をちかへり鳴音惜まぬ郭公村雨すぐる月のあけぼの
- 257 未飽時鳥
- 258 雨の夕月の曙折く／＼に哀数そふほと、ぎすかな
五月時鳥 伊桑忠易会せられけるに
- 259 いづれにか心ひかれてほと、ぎす鳴や五月のあやめ立ばな
閏五月時鳥 寛文四年家月次会に
- 260 くは、るもかひこそなけれ時鳥鳴や五月の空だのめして

橋

261 立花の昔にかへす袖の香もわきて身にしむ夕暮の空

軒橋

262 いとゞしく昔を忍ぶつまなれや花橋のかほる軒ばは

寛文二年四月廿五日私宅の月次はじめての会に

263 故郷のあれぬ折だに昔とて忍びしものを軒のたち花

橘薫風

264 心あれやぬる夜の風もやはらかに手枕かけて匂ふたち花

橘薫袖 永井正次の会に

265 咲そめて我物からの袖の香に花たちばなも昔こふらし

盧橘晚薫 金森範明の会

266 夕まぐれ人待宿のそら焼にかほりあひたる軒のたち花

〔国文研本 266 「夜盧橘」 五月やみ打しめる夜の空焼に匂ひおくれぬ軒のたちばな〕が入る〕

対橘問昔

267 ことかはせみずしらぬ世の昔まで哀忍ぶの軒のたち花〔国文研本には弘資点もあり〕

採早苗 延宝九年五月家月次会に

268 豊年の秋のたのみの八束穂も早苗取手にはやなびくらん

269 みたと田にさなへとる手もいとまなきめかり塩焼く蟹の乙女子

早苗多

270 植わたすかぎりもみえずはるくとなびく緑のわさ田をく手田

菖蒲 承応元年五月片山与英家二而

271 あやめ草ふける軒ばの露みればなれも五月の玉はかけけり

272 けふさらにえならぬ根をし引かけてあやめに匂ふことのはも哉

延宝七年五月家月次会に

273 長さねのますげもあれど今日更にあやめは深きえにし引れて

旅宿にてのきにあやめふけるを見て

274 五月きてけふは人まねさゝのやのいぶせき軒にあやめふく也

牡丹

275 日を経つ、盛をもみん草の名のはつかにけふぞひらき始ぬる

五月雨（国文研本詞書「寛文二年五月家月次会に」）

276 五月雨にくづる、岸の村竹もさそふ水あれば根を絶て行

277 しげり行かきほのつゝらくる人もなくて日をふる五月雨の比

278 さみだれやまさるみかさのにごりにはしまぬ蓮も浪の下くさ

279 晴そめて雲まの日影跡らしといつむかひみん五月雨の空（国文研本には「いやがき」との頭書あり）

雲おほふ軒ばの山のまゆ（こり）もいぶせくも有か五月雨（五月）の空

山五月雨 寛文五年五月家月次会に

281 雲の浪越て日数を降雨にさつきも今は末のまつやま

杣五月雨

282 さみだれのゐでこす波も高嶋やみほの杣木はひとりながれて
〔国文研本初句「さみだれの」に本〕

谷五月雨

283 たに河のみかさに高き波の音も雲の底なる五月雨の比

滝五月雨

284 岩かどをたゝくとなせのたき浪も雲こそとづれさみだれの比

池五月雨

285 通 かつまたのいけも水ます五月雨にいとゞ堤やくづれそふらむ

野五月雨

286 一年の雨もやこもる五月雨のかぎりもしらぬ武蔵の、原

浦五月雨

287 うら人は塩吸絶てけふいくか雲水はこぶ五月雨の空

閑中五月雨

288 淋しさの春のながめはさみだれの晴ぬ日数にこもる宿哉

水鶏

〔国文研本288「ほとゝぎすきゝしねざめに声かへて又もくゐなのおどろかすかな」が入る〕

289 天の戸の明安きよにたゝくこそ心みぢかきくゐな也けれ

- 290 さしこもるつまどはさすがあたら夜の月とやた、く水鶏成らん
- 291 柴のとのさしてそことも聞分ずた、き捨たる夜半のくみなは(国文研本には「水鶏何方」の題あり)
- 292 通 梓弓をじかの角のつかのまもなくてもしのかげぞ明行
照射 寛文四年五月家月次会に
- 293 鵜川 雨晴て出る程なきうかひぶねつかふ手繩のみじかよの空
- 294 深夜鵜川 承応元年五月十八日阿形与量家二面
後の世にしづまん罪もふかきよのうぶねのかゝり頼むはかなき^(五)
- 295 弘 蚊遣火 立のぼる煙吹こす夕風に涼しきくもるかやり火のかけ(国文研本評語「おもしろく候」)
- 296 蚊遣火のけぶりを月にそむけねば心なき名や空に立らん
- 297 隣家蚊遣火 《冷泉為景卿御家二面／定家卿四百年季に》
いぶせさは立もへだてず芦垣のまぢかくくゆるかひの煙に
- 298 螢 音にたてずみかく螢の光哉玉になきけん人も有よに
- 298 五月雨の雲の上まで行螢晴間の星やさそひいづらん
- 300 弘 窓螢 飛ほたる入くるまどは燈を先そむけつゝみるにすゞしき

301 まどの内に文見るわざも知ぬ身を諫め顔にも飛螢かな

池螢

302 蓮生る池の汀に飛ほたるにごりにしまぬ玉とみだれて（国文研本には資慶点あり）

水辺螢

303 せき入し清水が本の草薙くるれば玉をしくほたる哉

（国文研本303「せき入し汀にしげくとぶほたるうつるもすゞし中川の水」が入る）

近江国にまかりける比、湖辺ニ而螢をみて

304 飛ほたるもゆるおもひは伊吹山みねの草葉や種と成らん

江螢

305 こもり江に思ふおもひをいはねどももえてしるくも飛螢かな

沢螢

306 飛ほたる浅沢水のあさしともみえぬ思ひのかげぞうつろふ

河螢

307 すゞしさは網代のひをもよるくの螢やかゞり宇治の川波

橋螢

308 朽にける道の柴はしあやうさをしたべ顔にも飛螢かな

野螢

309 かげとめし月は入の、草の露にかはる光や螢なるらん

百首統歌中

310 春日の、もゆるほたるの宵の間はよそめ忍ぶの乱侘らむ

草螢似露

311 くさの上の露かるとへば吹風にをのれこたへて飛螢かな

（国文研本311「夏草の風にみだる、夕露とみえて涼しく飛はたるかな」が入る）

貞徳にいざなはれて石山にまかりけるに螢の飛をみて

312 ながれての代々に絶せぬ水茎の跡をみよとも飛ほたる哉

螢火秋近

313 飛ほたるのがすおもひは秋もはや塩がまの名の近く成らん（国文研本には弘資点あり）

杜蟬

314 夕日影かたへはもりの木隠にをのれしぐる、蟬のもろごゑ

晩夏蟬声

315 夏もはや末の松かげ立よればあらぬ浪こすせみの諸ごゑ

夏草

316 千種咲秋をもまたじ夏深きまがきのさゆりなでしこの花

あかず猶秋みん花の色くもしげみにこもる庭のなつくさ

夏草深

318 しげりあひて道なき庭にかる草もおしや秋みん花におもへば

夏草靡風

319 しげりあふ汀の草に河のせの玉もをかけて通ふ夕かぜ

山家夏草

320 すゝむとて露分なる、山里は人めも草もしげきころ哉

夏野

321 からでしものいとゞ深くさ野べはみん秋に先立花もこそあれ

瞿麦 延宝三年五月家月次に

322 たぐひなや露の白玉敷妙の我床夏の花の起ふし（国文研本には弘資点あり）

籬瞿麦

323 露ふかきまがきの内に生したて、こは世に知ぬなでしこの花

閑庭瞿麦

324 ちりならで朝露はらへとふ人もみえぬまがきの床夏の花

瞿麦帶露 （国文研本詞書「岡田利永家にて」）

325 むすびかへん霜迄のこれあれぬとも身はならはしの床夏の花

池蓮

326 池水のみぎはのあやめ時過てかほるはちすぞ又たぐひなき（国文研本には弘資点あり）

327 置露も秋とあざむく涼しさをた、へてすめる池の蓮葉

夕顔

328 置露も垣ねにふかき暮待て咲やすゞしき夕がほのはな

寛文三年六月家月次会に

329 埋れしかきほの雪の村消を葉がくれにみるゆふがほの花

夕立

330 有馬山夕立過てふく風の名残すゞしき稲のさゝはら

331 風あらく先音たてゝくれ竹のは山にきほふ夕立のあめ

野夕立

332 ふらぬより面かけみせて夕立の風あらましきまのゝかや原

333 すゞしさも外に余りて時のまに野沢水こす夕立のあめ

334 てる日には野べの草木のしほるゝも更にうるほふ夕立の雨

旅夕立

335 知しらず袖やしほるゝ夕立に逢坂こゆるせきの旅人

336 分のぼる高根は晴てたび衣すそのにさはぐ夕立のあめ

百首の続歌よみし中に

337 立よれどみゆる木陰もたび衣はるけさ思ふのべの夕立

村夕立

338 晴ぬらし雲るにひゞくなる神の音も遠市の村の夕立

海辺夕立

339 吹をくる塩風すゞし海越の山かきくもる夕立のそら

夏夜

340 せき入し庭の遣水月の影夜長しとても誰かいをねむ

夏月

341 せき入し月影ながらすゞしさを手にまかせたる宿のまし水

342 さえくくて真砂の霜と三日月の空にも氷るかげのすゞしさ

相州甘繩と云所二而人々歌よみし時

343 月に今千年の夏をわすれ水あかずもすめるかげのすゞしさ

夏涼月

344 月にとふ跡こそみえねすゞしさは霜夜にかよふ庭の真砂地

345 くる、まであかず結びし水の面に待とる月のかげのすゞしさ

山夏月

346 すゞしくも風にしぐる、呉竹のは山の月の短よのそら

347 すゞしさを更にかさねて氷室山出るも氷る夏のよの月

河夏月

348 さえわたる月影すゞし立田川今宵は夏の中絶るか

浦夏月

349 白波のよるく涼し此ころは月と秋とや須磨のうら風

砂月忘夏

350 弘 すすしさは夏とも分ず澄月や置まどはせる霜のまさご地

夏月似秋 曾谷格元家二面

351 夏ながらむかふもすすし山の端に秋をかけたる月の鏡は

夏海

352 弘 夕すすみ磯辺の松に音たて、秋待あへぬ奥津塩風

夏天象

353 弘 置わたす霜夜覚えて鶺鴒の端居すすしき夕暮の空

扇

354 弘 玉の緒もゆらぐ扇の風なれや手に取からに夏を忘れて

355 ならずより心のちりもはらふらし涼しや扇月にまがひて

356 箸鷹のすすしくも有か手にならず扇の風に秋や立らん

扇風涼

357 ねやの中にならずあふぎの音添てよそにしらぬ風の涼しさ

閨扇

358 ねやの内に蚊をさへはらふならず手の扇の風はあつさのみかは

扇風秋近

359 ならずよりねやの扇を待もあへず秋を手にとる風のすすしさ

360 ねやすし秋もあすかの河風やならすあふぎに先かよふらん弘

氷室 中山備州会に

361 なべてよは堪ぬあつさを氷室山有とや爰に風のやどりは

もの字を置いて

362 もれ出る日かげもみえずひむろ山しげみが下に冬を残して

夕納涼 嶋津飛州御家二面

363 夕すゞみ河辺のち原露ながら打敷袖にあきぞこぼるゝ

364 よもぎふや野となる庭にあげ巻の牛引つれてすゞむ夕暮

水辺納涼

365 水鳥の鴨のは色に行水を霜夜覚えて結ぶくれかな

366 すゞしさはたに風さむみ氷より打出し波に立かへるまで

船中納涼

367 夏ながら秋をうかべて池水に一葉の舟のよるのすゞしさ冬

滝辺納涼 松平丹州御家御会に

368 たきの糸の氷りに結ぶ冬も今くるかと斗たどるすゞしさ冬

松下納涼

369 松陰のいはねの清水手にくめば秋もや爰にとめて来ぬらん

370 すゞしさや秋のしらべにかよふらん松ふく風はことさらにして

夏祓 (国文研本詞書「寛文十二年閏五月家月次に」)

371 身のちりをはらひ清めてみそぎ河心の水の底もすむなり

372 みそぎして秋も飛鳥の河風やけふより通ふ袖の涼しさ(き)

373 弘行水に身のうきくさも根を絶てけふみな月のはらへすらしも (国文研本には合点なし)

六月祓

374 みそぎする夜半にや秋の立田川夏のうきせも越て行覧

375 三輪川やけふのみそぎに年波の半過行印をぞ見る

延宝九年六月家月次会に

376 みそぎ河神のうけひくしるしとや麻の末葉になびくゆふしで